

『井上ひさし ベスト・エッセイ』には、大小60編を超すエッセイが編集されている。もう少し、考えさせられたエッセイを紹介し、私の感想を書きたい。

「魯迅の抗議ノート」に下記のように書いている。「魯迅の五十六年の生涯を貫くもの一つに『一般論は危険だ』という考え方があったのではないかと、私は思う。『日本人は狡猾だ』、『中国人は国家（くに）の観念がない』、『アメリカ人は明るい』、『イギリスは洒落ている』という言い方は避けよう。日本人にも大勢の藤野先生がいる。中国人にも売国奴がいる。日本人とか、中国人とか、ものごとを一般化して見る見方は賛成できない。彼の膨大な雑感文には、この考え方がつねに流れている。」森喜朗前会長は女性差別発言で、辞任に追い込まれた。彼はこんな発言をしている、「だけど女性がたくさん入っている理事会は時間がかかります。…女性っていうのは優れているところですが競争意識が強い。誰か一人が手を挙げると、自分も言わなきゃいけないと思うんでしょね、それでみんな発言されるんです。…私どもの組織委員会にも、女性は何人いますか、7人くらいおられますが、みんなわきまえておられます。」彼の中には女性蔑視の視点が抜け難くある。それは、女性を一括りにして暗に「わきまえない」と見下していることである。

「いわゆる差別用語について」に下記のように書いている。芝居『藪原検校』の初演後、『朝日ジャーナル』の記者から「盲という差別的なコトバが連発され、これは、盲人を不当におとしめるもので、作者の志の低さを見た」と批判された。井上氏は、紋切り型での言葉狩りをすれば、古典落語が放送できなくなり、文化を貧しいものにすると言ひ、「この芝居を盲人にたいする差別だという見方が、かえってどれだけ差別的であったかにいまこそ気づいてほしいと思うのです」と書いている。また、「めくら、片輪、白痴（ばか）」などは、高度経済成長の過程で、おとしめられ、切り捨てられてきた人たちで、言葉を覚えて呼ばれても幸せになる訳ではなく、彼らが生き易い社会制度を作ることが幸せを生んでいくと言う。聖書は、らい病者（ハンセン病者）を癒やす主イエスの奇跡を伝えている。ギリシア語の「レプロス（らい病）」という言葉が差別用語とし、又事実ハンセン病者ではないと「重い皮膚病」に変え、最新の聖書協会共同訳は「既定の病」と訳されている。「既定の病」では何のことか分からず、聖書のメッセージが伝わらないのではないかと。人を傷つける差別、不快用語は心して避けるべきは当然であるが、熟考を要すると思う。

「心の内 昭和は続く」では、深刻な問を発している。天皇は自分の言葉と行動が禁じられている。ところが、「(戦争中)私が自分で決断したのは二回でした。(2・26事件と、いわゆる御聖断)」「開戦時には閣議決定があり、私はその決定を覆すことができなかった」と言っているが、日中戦争が拡大、全面化した時、軍令部総長と参謀総長に、「斯クノ如クニシテ諸方ニ兵ヲ用フトモ戦局ハ永引クノミナリ 重点ニ兵ヲ集メ大打撃ヲ加ヘタル上ニテ我ノ公明ナル態度ヲ以テ和平ニ導キ速ニ時局ヲ收拾スルノ方策ナキヤ即チ支那ヲシテ反省セシムルノ方途ナキヤ」、また南部仏印進駐の際、「国際信義上ドウカト思フガマア宜イ（特ニ語尾ハ強ク調子ヲ高メラレタリ）」と言った言葉が記録されている。井上氏は、軍隊の統帥権を握っている気合がこもっているこれらの言葉が天皇の発言なのか、防衛庁戦史室や杉山元参謀総長や木戸内大臣たちの偽造なのかがはっきりしない内は、心の中では昭和は終わらないと、「すべては昔のこと」と思うのは日本人だけなのかと書いている。天皇は戦後、「米国が沖縄その他の琉球諸島の軍事占領を継続するよう希望する」と語ったと言われているが、この言葉が沖縄県民の苦難と悲劇を増幅したと、私は思っている。